



## 「スピリチャル・スケープと心身の癒し」

壱岐島における鎮守の森コミュニティ・プロジェクト/ウェル・ビーイング(心身の健康)編/令和5年度地域調査と実証ワークにおける考察

2024年3月5日

鎮守の森コミュニティ研究所 特別研究員 倉橋陽子  
山の上のヨガ教室主宰/ヨガ療法学会所属

# 1、はじめに

杵岐島における鎮守の森コミュニティ・プロジェクト/ウェル・ビーイング(心身の健康)編/令和4年度地域調査と実証ワークでは、人的資源、地域自然資源、施設資源など、杵岐の市民と杵岐ならではの地域資源を掘り起こしてきた。たくさんの方々に協力いただいたことを心より感謝いたします。

当プロジェクトのアプローチとして、①身体アプローチを重視する、②コミュニティの安全性、③自然の中でのアプローチを重視する、④長期的な時間軸を意識することを重視する、を結論づけた。その中で、④に関わる杵岐の原始信仰、自然信仰、地域に残る習慣や風習、風土を調査し、上記の③に関わる鎮守の森をはじめ、自然を持続可能としてきた仕組みを理解すること、それらが心身の癒しにどう関わるかを考察することを本年度の目標とした。

## 2、要約

鎮守の森における心身の癒しには、「スピリチャル・スケープ」が重要だと結論づけた。「スピリチャル・スケープ」とは、筆者の造語である。スピリチャル・スケープは、自然信仰や民間信仰の行事、祭、神々を祀る祠は、地域にとって重要な地域資源や地域利用の先人からの伝承を伝える景色であると同時に、自然と人間の共振共鳴にとって、自然本来の景観(スケープ)が人間に癒しを与えると意味づけた。

「スピリチャル・スケープ」を読み解くことで、その土地が物理的にも無理がない状態を言葉でない伝承として作用し、地域の自然を持続可能とする。それらを読み解くプロセスで、三つの作用が、心身の癒しに貢献する。一つ目は、先祖や先人から残してもらった恩恵や時間軸の長さを理解する。二つ目は、自然信仰は自然と人間の共鳴共振であることを体感する。三つ目は、私たちはどこからきてどこに帰っていくのかという死生観に目を向けさせる。

ストレスが原因となって身体に不調がくる心身症の深層の部分である本来態へのアプローチは「自然の子への気づき」が重要だと心身医療の中でも位置付けられている。明治時代以前では当たり前であった、それぞれの土地の神様「産土神(うぶすながみ)」のもとに人々は帰るといふ古来からの考えから解離している現代、自分が自然の子であるという意識もまた遠のいている。心身の健康を本質的に扱うためには、身体の系統進化と同時に「心」の系統進化への理解が重要である。そのためには、その土地の自然信仰や民間信仰(自然と人間との共鳴)を理解するプロセスが自然と鎮守の森における心身の癒しにつながる。それは私たちがどこからきてどこに帰っていくのかの死生観とも関わる。つまり、よりよく生きようとする力は、自然に対する感受性の広がり、共鳴共振の中に現れると結論づけた。

それらを杵岐の自然信仰、特徴的な民間信仰、暮らしや人とのリサーチやヒアリング、プログラムの実施を通して考察した。鎮守の森における心身の癒しのアプローチは、前年の4つに加え、「自然信仰・民間信仰の特性を生かす」を加えることとした。①身体アプローチを重視、②コミュニティの安全性、③自然の中でのアプローチ、④長期的な時間軸を意識する、⑤自然信仰・民間信仰の特性を生かす、と再定義した。

⑤を探るプロセスをアカデミック・ウェルビーイングと名付け、それぞれの土地に刻まれた歴史と風土、地域の特徴的な信仰をアクティブ・ラーニングを通して学ぶ。その学びは、「自然と共鳴」するプロセスで心身の癒しとなる。自らは生命循環の一部であることを身体で理解し「自然の子として社会に生きる」ことで地域の自然循環に「楽しみながら貢献」し、自然と地域の課題にも気づいていく。それらは病気でありながらも心身を癒し、よりよく生きることを目指すことと同じとなる。このラーニングをそれぞれの土地で実施できるための「スピリチャル・スケープ・リサーチシート」を成果物とした。

### 3、調査報告

壱岐の特徴的な営み、暮らし、自然信仰、民間信仰を調査した。

#### (1) 暮らしの中の森林「せどん山」と講中

昨年の調査で割石さんから教えていただいた「せどん山」が壱岐における暮らしと森林がどう関わっているかを、2023年12月20日、実際の集落を訪れ調査した。

壱岐島には「浦」と「触」と呼ばれる集落カテゴリーがある。単純に説明したら「触」は内陸地で「浦」は海岸沿いである。現在の住所でも使われている。その関係は、今の壱岐市のまち並み景観の根底にあるもので、現在でも、街なみ環境整備事業が策定された勝本浦では壱岐の「浦」のまち並みを見ることができる。また、一部の農地集落部では、住宅と農地と背後の樹林地が形成する「触」の集落形態を見ることができる。その母屋の北東の強風を遮るための樹林地が「せどん山」と呼ばれる。背戸山―屋敷―前畑を1単位(図1)とした平戸藩により行われた土地割替制度を基盤にした定住社会であるのに対して、「浦」は漂泊の世界であり、漁業、小崎の家舟、渡良浦の北前船など、海を媒介とした対外的活動の拠点であり、外へ開かれた窓口の役割を果たした。「浦」は密居集落であり、農地を持つことが出来なかったが、それによって「触」は農地を最大限確保し、生産を高めることが出来た。こうした対照的な二つの世界を結ぶものとして、市が行われ、相互の交流の場ともなっていた。

(図1) 壱岐市発行 景観の特性

<https://www.city.iki.nagasaki.jp/material/files/group/18/chapter2.pdf>

まち並み景観より



図：「触」の散居住宅の配置パターン（平面図、立面図）



(写真1)母屋の後ろに背戸山 (写真2)背戸山は雑木と人工林

地域の人々に「せどん山」と呼ばれる背戸山は、東北方面からの強風から母屋を守る役割(写真1)をしつつ、過去には樹木を薪にし燃料としてエネルギー補給の役割もしていた。(写真2)そのせどん山の麓には前畑や生活水として使われていた井戸(写真3)があり、その水も蓄えていたのが、せどん山の樹木でもある。今ではその井戸は使われていないが、樹木が蓄えた水が染み出している。このお邪魔したお宅では、約25年前まではこの井戸を使っていたとのこと。同時に、ガスや電気、上下水道の普及から、手入れが必要になった樹木の手入れや間伐した木々はゴミと認識され、手入れが多すぎる厄介者として扱われている現状もある。

(写真左・写真3)もう使われなくなった井戸には実生で生えたであろう木を切った跡がある。



(写真右・写真4)湧水が染み出している様子

これらの集落の一番小さい単位は「講中」として地域の祠や社を守り、年中祭りや行事があるが、何を祀っているかは、あまり意識しておられず、「前々からやっているのもそのまま続けている」と継続をしている。今後、地域の人たちで調査できるワークシート(別紙2)を作成したいと考えたのは、ここの集落のおかげである。

## (2) 営みの中の湧水:「壱岐る道」水の循環編

同行の中村研究員の修士論文である「水循環のプラネタリーヘルスに関する研究」と連携した調査である。彼女の昨年実施したDeepTimeWalkの壱岐版として「壱岐る道」とし、2023年12月18、19日に壱岐の市民2名と大阪からの訪問者1名とともに「水の循環」をテーマに調査した。壱岐市は四方を海に囲まれながらも豊かな真水がある。それは島の地下水によるものである。それらをどう営みの中で組み込まれているか、またどのように信仰と結びついているかを私は主な関心ごととして調査した。まずは、水の利用が欠かせない焼酎の蔵元「玄海酒造」を訪問し山内社長に案内していただいた。製法から歴史まで詳細に説明いただき、心から感謝申し上げたい。(写真5、6)



(写真左・写真5) 壱岐には七つの焼酎蔵がある (写真右・写真6) 古式製法も見学できる。  
 山内社長の先代である山内賢明著「壱岐焼酎」(長崎新聞新書)において明記されているように、壱岐で一番高い山、岳の辻(標高212.7メートル)でおおよそ20万年前、壱岐の最後の火山活動でできた火山砕屑山である。ここに降った雨は、地下に染み込みながら濾過されて良質の地下水となる。また、幡鉾川の水源地は、島を覆うようにしげる森の木々が蓄えたものである。現在、玄海酒造は、岳の辻を水源とした地下水をボーリングによって組み上げている。(写真7)、



(写真左・写真7) 地下水はボーリングで組み上げられている (写真右・写真8) 神棚

地下水の恵みによって支えられている酒蔵の神棚には、当初、水域の源泉に近い神社を祀っていると予想していたが、神棚には、酒の神様である大神神社、氏神である軍越神社、壱岐の中心的存在である住吉神社が祀られていた。(写真8) その神棚に祀られている氏神様(写真9)と、水域である岳の辻の頂上と神社を訪れた。(写真10・11)



(左・写真9) 軍越神社 (中・写真10) 岳の辻頂上 (右・写真11) 頂上に祀られる水の神様である龍神、龍光大神。

## (2) 暮らしの中の湧水: 壱岐の七名水

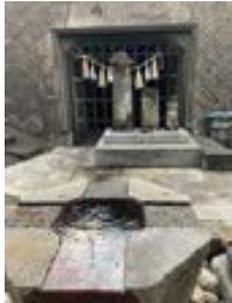
壱岐の古文書にも登場する壱岐の七名水を令和四年の調査も含めて全て調査を完了した。上下水道が完備される前は、営みの中に組み込まれていた。その中でも、枯れている名水と枯れていない名水の違いが見て取れた。

現在の仮説としては、枯れている名水と枯れていない名水の違いは、以下の3点で観察している。

- 1、鎮守の森の根っこ/落葉→土中環境への貢献ができていないか？
- 2、土地利用のスピリチュアル・スケープの温存＝地域の祠や神々が今も丁寧に祀られているか？
- 3、地域の年中行事が生きている＝住んでいる人が必要としている守っている・大切に気づく機会

上記をもとに、それぞれの名水の現状を分析する。

◎吉岐の七名水

名前と水量★	写真	鎮守の森の根っこ/ 落葉＝土中環境への貢献	地域の祠や神々が 今も丁寧に祀られているか否か	地域の年中行事や 信仰の行事が生きているか
<p>御手洗水滝(おちょうずのたき)</p> <p>★★★★★</p>		 <p>観光名地にもなっているため手入れが行き届いた落葉樹。深い根が張っている。</p>	 <p>自然信仰の石、裏のお堂にはお大師様、阿弥陀様が祀られている。</p>	<p>具体的な日程はわからないが、お堂を見る限り、人の手が入って、清掃されたり、整備された様子が伺える。お堂までの道のりは、急な坂道でもあるため、高齢者だけでは難しい場所であるが、目の病気治癒のご利益が人は参拝するであろう。</p>
<p>桜川(さくらごう)</p> <p>★★★★★</p>		 <p>この周りだけは桜の木や湿地帯が守られているので、湧水がまだある状態。</p>	<p>渡良村の青波賀大明神(スサノオノミコト)の花川 周辺は畑と、徐々に進む住宅開発があるが、手入れがされている様子がある。</p>	<p>未調査</p>
<p>常盤井(ときわごう)</p> <p>★★★★★</p>		<p>この水は、武生水(むしょうず)という村の名前のもととなるくらい豊かな湧水があった。周辺には、樹木や鎮守の森はない。水量からみても地下水の組み上げの可能性もある。</p>	 <p>男根の祠と水神様が祀られている。</p>	<p>市の施設として整備するときに、湧水のエリアも同時に整備しているところに、地域の人たちが行政も含めて大切だと理解している一例かと考える。</p>
<p>椿川(つばきごう)</p> <p>★★★</p>			<p>井戸の周辺に水神様あり。</p>	<p>行事は不明だが、とてもきれいに清掃されているので、地域の人に大切にされている様子は伺える。ただ、未使用のポンプが放置されているので利用面で</p>

		今も水は湧いている。 その背景には昔ながらの里道がありその周辺には豊かな樹木が備わっている。		はあまり活用されていない可能性がある。
美濃谷の涙川(みのんたにのなみだごう) 恐れ多く井戸を除けられなかったので水量不明		集落の背戸山と重なるような形に見える。広葉樹がしっかりと根づいている。	33番札所の敷地。堂主は、小山弥兵衛(こやまやへえ)という、但馬の一揆の首謀者が、沓岐に流されて、預けられた見性寺。明治時代の廃仏毀釈により、廃寺。	井戸を覗き込むと、祖先の霊や親しい身内の人が、井戸水に浮かんできて、会うことができるとい水とあの世がつながる民間信仰。
御手水井(おちょうずごう) ★★		背景には雑木が繁っている。手入れをされた様子はない。 その上部は、小島神社の海に向かったの水域出口であり護岸工事と土地造成が急激に行われた上部のエリアが見えた。その影響を分析しやすい水域の一つではないかと考える。 	 水域出口には海に向かって祠が祀っている	未調査
鳥山井(とりやまごう) ★★		夏は特に涼しく、近所のお年寄りや若者が、この水辺に集まり、納涼。冬は、他の場所の水よりも温かいので、近くの男女が、朝夕に集まり、洗い物を。沓岐の湧き水のなかでは、1、2とも思われる名水だったが今は湧水の量も少ない。周辺の木々も鬱蒼として風通しが悪い。	 周辺に位置されたであろう石碑がまとめられている。	未調査

上記の七名水の状況は一部年間行事などが不明な点もあるが、仮説として、自然信仰や民間信仰の行事(祭)が残り、地域にとって重要な地域資源や地域利用の先人からの伝承を伝える景色が残る場所であればあるほど、地域に守られ湧水も豊富な傾向にあるように考察する。

### (3)暮らしで大切にしているものと信仰：壱岐神楽

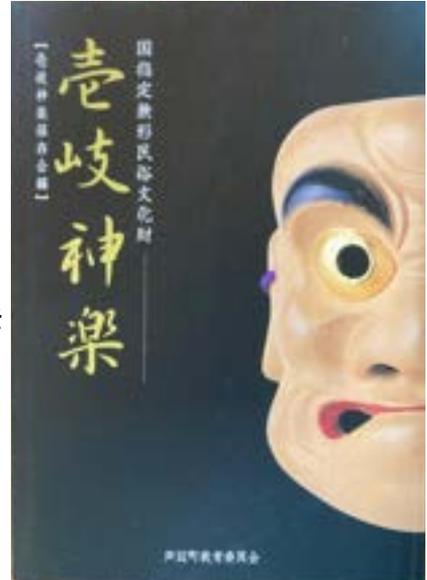
壱岐では1年間を通して主に秋から冬にかけて、小神楽、中神楽、大神楽、そして年に2回、8月と12月に行われる大大神楽があり、島中どこかしらで神楽が行われている。国指定重要無形民俗文化財である壱岐神楽の特徴は、3点である。

- 1、神職のみが舞い、楽曲を奏でる社家神楽
- 2、2畳の狭いスペースで舞う
- 3、神楽殿を設けず拝殿などで神々と向き合って奉納する

始まりは、約700年前、南北朝時代から始まったとされる。文化財として登録される時に、平戸神楽と内容を調整したとされます。右の写真には譜面おこしがされていますが、神職同士では、今だ舞も笛も口伝であると、12月の大大神楽の開催地である住吉神社の川久保禰宜のヒアリングで教えていただいた。川久保禰宜は、神楽の「神相撲」の舞手である。

今回は12月20日に毎年開催される大大神楽を訪問した。

特に壱岐では、「猿田彦」の題目を呼び名を壱岐独自の「さんげーき」と呼ばれ、他の神楽の猿田彦と異なる特徴を持つ。なぜ呼び名が違うかは、神職で知るものは現時点ではない。鬼棒(ざい)をもち、鬼面は鏡岳神社は天狗の鼻だがそれ以外は鼻は低く、他の神楽では舞は二人だが壱岐では一人で舞う。(写真12)舞ぶりは、大変ゆるやかで、現在は35分だが、本来は1時間以上かけてゆっくりを目指すべきだと言われる。(住吉大社禰宜談)古来の形を継承する舞は、ゆるやかな舞が多く、類似例として、四天王寺聖霊会の日本最古と言われる獅子舞も、ゆっくりと四方を結界をつくるように舞われる。



(写真左・写真12)壱岐神楽「猿田彦」一人舞・鼻の低い鬼面は、右写真の備中神楽との比較

神楽の前半と後半の間には、「湯立神事」とお餅の振る舞いがおこなわれる。(写真13)また、年末のため、餅つきやしめ縄作りが行われ、古くから人々の暮らしに根づいている様子うかがえた。



(写真13) 壱岐大大神楽の前半と後半の間で行われる湯立神事



## (4) 民間信仰と暮らし



漁師を引退したのち観光ボランティアガイドをし、今も現役でヨガをする小嶋武廣さん(写真左)のヒアリングでは、暮らしの中に、民間信仰の中に、自然信仰から壱岐の信仰のレイヤーが深く残っていることが日々の暮らしの祈りに根づいていることがわかった。小嶋さんご自身も信仰のたまたまいが身に纏われ、思わず手を合わせそうになった。

小嶋さんの地域では、いつも地域のお祈りする場所には、「まち石」があり、「おじゅうず・珠数」と、いつもお堂に置いている石を36回まわしながら祈る。毎月、決められた日に行い、その数珠の大きい玉が来たときに、額につけて「ア」といいながら、自分の想いを込める。女性や子供、老若男女みんなで「散華散華六根清浄/おやまにまします・えんしょう金剛」と36回と唱え、その後、南無大師遍照金剛を唱える。そのあと皆で直会として、ご飯を食べる。また、「甘茶」を毎年4月8日4に毎年飲む。おまじないとして昔から伝わるのが、「はくぶつごん(白仏言)」を四角の紙にかき、その紙を柱の根っこねに、逆さに差し込むと、蛇や邪気を追い払うと言われる。

これらのヒアリングには、壱岐の民間行事の中に、以下のように、自然信仰から一番新しい禅宗まで信仰のレイヤーが見て取れる。

- まち石＝自然崇拜
- 散華散華六根清浄＝修験道・神仏習合
- やまにまします・えんしょう金剛・南無大師遍照金剛＝密教
- 4月8日の甘茶＝甘茶を飲む江戸時代民間療法＋顕教で広がる釈迦降誕会
- 白仏言を根っこに刺す＝白仏言は禅宗(曹洞宗)の教えと民間まじない

## (5) 壱岐の浦

2023年12月18日、NPO法人壱岐しま自慢プロジェクト理事長であり、壱岐古文書研究会会長で観光ボランティアもされる松崎靖男さんは、船舶電気店を営む傍ら、壱岐の歴史を語りたくて古文書を勉強されておられる。壱岐を詳しく調査された地元民俗学者、山口麻太郎氏が、1933-1958年までの「壱岐郷土研究所日誌」をまとめられた壱岐郷土史共同代表の一人である。奇跡優しい眼差しは壱岐の雰囲気そのものである。壱岐の豊富な歴史をベースとした様々なガイドコースを作っておられ、今回は特に勝本の歴史についてヒアリングを行いました。勝本の浄化槽を掘ると、200年代、約1800年前の人骨や貝輪が見つかり、この人骨は、奥歯から高貴な人だと推測される。カラカミ(唐人・加良美)遺跡やセジョウ遺跡も勝本にはあり、原始の古代神殿遺跡があることから、古くからの信仰の場であったと思われる。壱岐の干し鮑は奈良時代から行われていたと言われ、約800年前の鮑が串山ミルメ(海松目)遺跡で見つかっている。壱岐では、東の八幡は、女性の海女、西の小崎は男性の海人と呼ばれ、平戸藩の鮑をとる権利を分けた。漁業組合ができたタイミングで漁が民衆のものではなくなったと言える。明治政府と交渉したことが記録に残っている。



壱岐における海側の歴史や暮らしにまだまだリサーチが及んでいないが、松崎さんのヒアリングをした場所は、倉光邸と呼ばれる屋敷(写真右)で行われ、そこには豊かな海による豊かな暮らしがみて取れる意匠が施された場所であった。写真右下は、お風呂の天井で、当時のお寺のお風呂と同じ意匠が民間の家で施されていることから大変裕福であったことが伺える。

倉光邸に親族の導きから移住した中島さんは、壱岐の様々な人たちをつなげてくれたこと、心から感謝申し

上げます。

その倉光邸から見つかった当時の恵まれた環境を物語るものとして、魔除として鯨の形をした細工しおり(写真下)は、当時の恵まれた環境をこちらにも物語っています。



## (6) 壱岐の植生と民俗学

2023年12月18日、壱岐の植生、そして植生を深く知るために、民俗学や地形まで幅広く壱岐を見てこられた方、山内正志先生からヒアリングをいたしました。あまりにも圧倒的な情報量で、母屋の中は資料でいっぱいであった。図書館で閲覧させていただいた「島の科学」は内容が大変充実しており、その発行研究会の前会長である。いくつかの資料や説明を聞くだけで恥ずかしながら90分があつという間に終わり、次回は泊まり込み、一緒にフィールドを歩きましょうと暖かいことを場をいただきました。

国内旅行業務取扱管理者主任でもあられるので、この壱岐というフィールドをアカデミック・ウェルビーンとして連携していく可能性をもったお方である。

住吉神社の川久保禰宜も、「島の科学」含め、壱岐の多く情報を知っておられる山内先生の資料をご存命のうちにまとめることは、壱岐にとって大変重要であると述べられている。私たち鎮守の森コミュニティ研究所として何かできることはないかを引き続き考えていきたい。特に、中村研究員の領域にも大変重なるところがあるので、連携を進めていくようにサポートできればと考える。



## 4、プログラム実施

壱岐は島中が博物館と言われる特性を生かして、令和5年に特化した自然信仰のレイヤーを感じる場所での心身の癒しプログラムを2つ実施した

### (1)天ヶ原セジュウ神遺跡(古代セジュウ神殿)の海岸と清掃

2023年12月20日、壱岐の接点住民である環境教育ボランティアであり、防災ボランティアでもある中山忠治さん(写真14)のご指導のもと、元々神殿のあった場所での清掃プログラムを実施した。中山さんは、「ゴミを拾った子どもたちはゴミを捨てない」を信念に15年以上、このプログラムに関わっておられる。参加者は壱岐市外の大阪から1名、東京から1名、横浜から2名の参加者とともに実施した。(写真15)

事前に、筆者から壱岐の北部、天ヶ原海岸という見晴らしが良く景色のとてもきれいな海岸は、鎌倉時代に元軍が攻めてきた場所でもあり、昭和36年2月、宮坂組という土木会社が、護岸工事をしていたとき偶然、中広型銅矛が3本並べて置かれているのを発見し、長さ80cm、幅8cmの大きさの銅矛が見つかった場所であることを説明。矛の埋葬推定時代は弥生時代で、発見されたのは、「セジョウ神」と呼ばれている石の祠の、下からである。その海岸は、今は神殿遺跡の面影もなく、海岸には多くのゴミが流されている。それらのゴミの中には、ヤシの実もある。(写真15)原の辻遺跡でも祭祀に使われていた「ヤシノミ土笛」が流れてきたヤシの実を象った理由が、海岸に流れ着いた神様からの贈り物を模したものを利用したあたりに古も今も同じであることを体験した。



(写真15)環境教育ボランティア中山忠治さんとの清掃では、流れ着いたヤシの実も発見。



(写真左・写真15)筆者左、他参加者とともに、約1時間でたくさんのゴミ広いが。

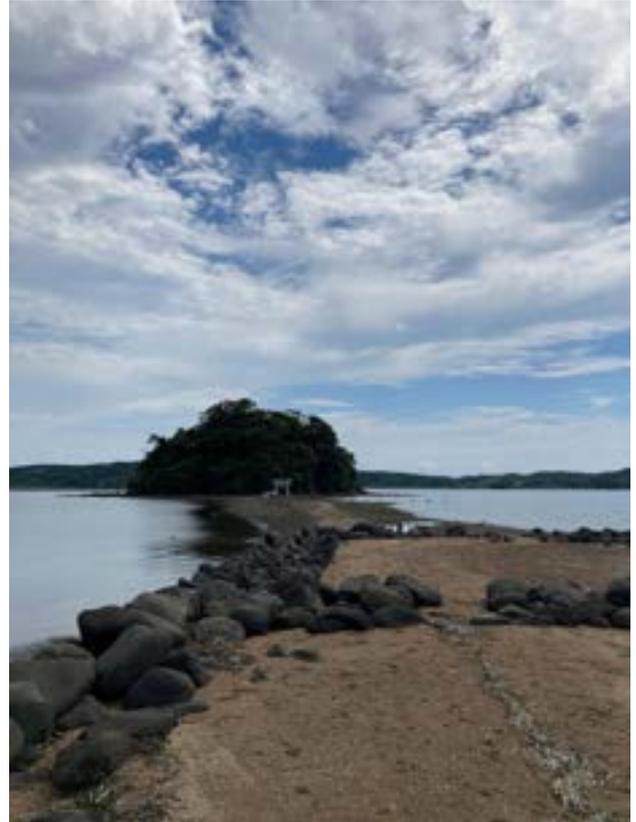
(写真右・写真15)土台石の海岸と波音とともに黙々と今の作業に集中する清掃は動的瞑想。だんだんと大きなゴミが減る様子。次第に細やかなゴミも、様々な種類のゴミがある。

参加者は、壱岐の土台石の海岸と古への想いをはせ、真冬の海辺での過酷な清掃でありながら、今ココに集中する動的瞑想を、今回の旅の1番の思い出と語ってくれた。

### (2)ゆらぎの月セラピー

2023年12月21日、大阪からの参加者3名とともに、自然信仰の御神体そのものである小島までの道が潮の

満ち引きを実際に目で見る事ができる場所で瞑想を行った。(写真16)45分間、少しヨーガのアーサナと呼吸法を行ったあと、ボーっとその移り変わりを眺める。(表紙写真)いつしか小島神社に続く、参道のような道が出現する。(写真17)その日、実施偶然にも引き潮した場所で「岩がき」を採取する地域のおばさまたちと出会い、交流する。(写真18)オイル漬けして売ったり食べたりするそうで、この時期の美味と出会いを味わう。



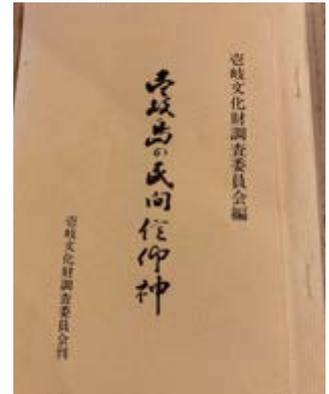
(写真左・写真16)満潮の状態では小島までの道のりは海の中  
(写真右・写真17)干潮になると、参道のような道が出現し小島に渡ることができる。小島には、小島神社がある。



(写真18)岩がきを採取する地元のおばさま

## 4、民間信仰のデータ分析

住吉神社の川久保禰宜から預かった昭和50年沓岐文化財調査委員会「沓岐島の民間信仰神」(写真右)に掲載された民間信仰の内容を、主な信仰の内容によって分類を行った。一つの祠でいくつの言い伝えの意味を持つものもあったが、最初に記載されている内容で集計する。(図2)



(図2) 沓岐における民間信仰の神々集計表よりベスト10抜粋

NO	神々の名前	主な言い伝え	神々カウント数
5	ヤボサ(矢保佐・矢保左)神	疱瘡(天然痘)	34
11	川の神・水の神	水に関するところ全て	30
9	山の神	牛馬の繁殖・オゴゼを上げる	25
88	地蔵	身体パーツの病気・無病息災	22
38	塚墓神	お墓・供養	21
2	恵比寿神	鯨組と関連	16
6	庚申	猿田彦	16
7	竜神	五穀豊穰・雨乞	16
21	牛神	牛の安全と繁殖	15
25	供養様	虫供養	15
89	観音	安産・子どもの病気平癒	15
94	弘法大師	家内安全・無病息災	15

合計数は、514箇所もあり、島には神様だらけと言い切れるであろう。ベスト3は、天然痘を鎮めたり、防ぐ役割を持たせたヤボサ神が34箇所、水に関する場所に設置されている川の神・水の神が30箇所、山の神は25箇所である。山そのものを崇めている訳ではなく、牛や馬の繁殖を願ったり、オゴゼをあげると書かれている。オゴゼを上げるとは、異形の風貌により「おこ＝醜い・ぜ＝魚名語尾」で魚の「オコゼ」を山の神に捧げることである。オコゼは古来より、豊漁を祈念する際、山の神への供え物とされている。山の神は「醜女(しこめ)」だったため、自分より醜い魚である「オコゼ」をみて、我が身をなぐさめたといわれています。その捧げる場所であったであろうと推測する祠が、沓岐には25箇所もある。海のことを山に捧げるといふ、海と山がつながっていることを知っていたか、今もその意識があるかは、また後日のヒアリングをしてみたい。

その他をみても、恐れる対象が畏れとなり神となり、また地域において大切にしてきたことが民間信仰の中に残っている。沓岐に住む人々が、代々、見えないものへの畏れ、大切にしているものの現れがみとれる。

## 5、参加者所感

壱岐市民Sさん: 玄海酒造さんで歴史を聞けたことはとても意味深い。壱岐で住みながらも面識がなかった人にたくさん会うことができた。麦焼酎の発祥の地だけでない理解が深まった。研究員の質問が私たちでは知り得ない深い質問だったので深く知ることがよかった。実家の井戸をまた復活させたい。

壱岐市民Nさん: 焼酎七蔵のライバルでもありながら発展してきたことに感動。水の循環考えたことなかったが今回で知れた。「触」の江戸時代からの形が、本当にまだ残っていることに感動した。観光の表面的視点だったのが変わった。

壱岐市民Kさん: 今まで自分の地域の信仰を知らなかったことが恥ずかしかった。あのあと壱岐の歴史を読んで実際にそうだったのだと自分の家も「触」の江戸時代からの形が「平戸パッケージ」だったことを知り驚いた。家の近い「阿弥陀」お堂は、9軒で守っていること、年に5-6回のお観音参りや仏行事、毎年1月20日には、お神さん行事で弓をひき、御神楽の大きい集まりがある。6月7月植え付け祈祷があり、11、12月には地域の人たちが集まる。地域の建て替えが必要になってきた祠が痛んでおり、買おうと思ったが、自分たちで作ってみることも考えたいと思った。

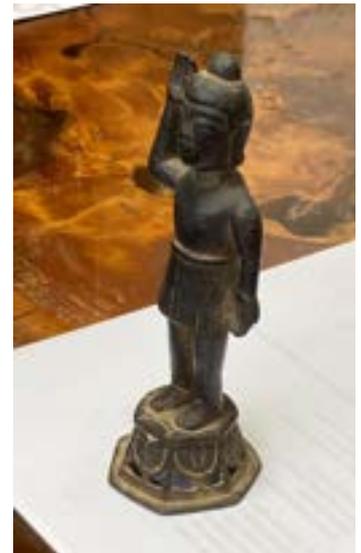
壱岐市外Sさん: 普通では知り得ないことを知れた。玄海酒造いただいた本にも、深く壱岐について書かれていた。私は「食」に興味あり、玄海酒造の歴史から食べ物の組み合わせもした。壱岐には「日本酒がないのはなぜだ?」と思っていた。それは日本酒は贅沢、税金が関わっていることを知れた。日本酒作っている酒蔵へ。水のよいところ、水神を新に祀ったことを知れてよかった。郷土料理、そこで味わうもの、調味料、麦味噌、素麺、にこまる米、醤油、うどん塩味ベースで薄い色。京都から文化から来ている証の京言葉など、食で壱岐や自分の身の回りも今後も見ていきたい。

壱岐市外Mさん: 海人族の繋がりを個人的に調べているのですが、昨年訪れた対馬とともに、壱岐にもたくさんの自然信仰の名残や、本州では残されていないものがいまだに根づいているように思える。対馬よりも壱岐は優しさを感じる。特に印象に残っているは、セジュウ神殿跡の清掃だ。あんなにも寒かったのが夢中で寒さも忘れて集中できた。ゴミからもいろんなことがわかる。また、あの寒い場所、厳しい環境下でしか咲かない花などもあり、まだまだ奥深い壱岐にまた訪れたい。今回は、龍蔵寺に朝鮮半島の流れを組む仏像(写真右)を当日のアポイントメントにも快く見せていただいたことに、感謝しています。

壱岐市外Sさん: 妻の親戚とのルーツに関わる史跡もみることができ、大変興味深い滞在となった。2泊3日では足りない。違う季節にも来てみたいと感じた。たくさんの人との交流は、刺激になりました。

壱岐市外Sさん: 2泊3日では足りない。また違う季節にも訪れたい。あつたかい時期に来てみたい。

壱岐市外Wさん: 壱岐の人や壱岐以外の人と、いつもの生活では会えない人たちと会えたことがとてもよかった。小島神社は前回訪れた時は、島の道が出た時の写真を撮って、朱印をもらっただけで終わったが、今回は潮の満ち引きの中でゆっくりと過ごせたことがよかった。観光では得られない体験を今回もすることができ、同じ場所に何度も訪れたい、後からもよく思い出す。



## 6、考察まとめと今後

広井所長の沓岐視察資料にも明記されていたように、原初にあった「自然信仰」が、いかなる過程(以下、Step1-2)で「神社」へと進化していったかのプロセスが鮮やかに残されている場所が沓岐である。

(引用)

Step1.自然信仰(“縄文”) 小島神社 女嶽神社

Step2.神社への過渡的段階(“弥生”、農耕) 原の辻遺跡

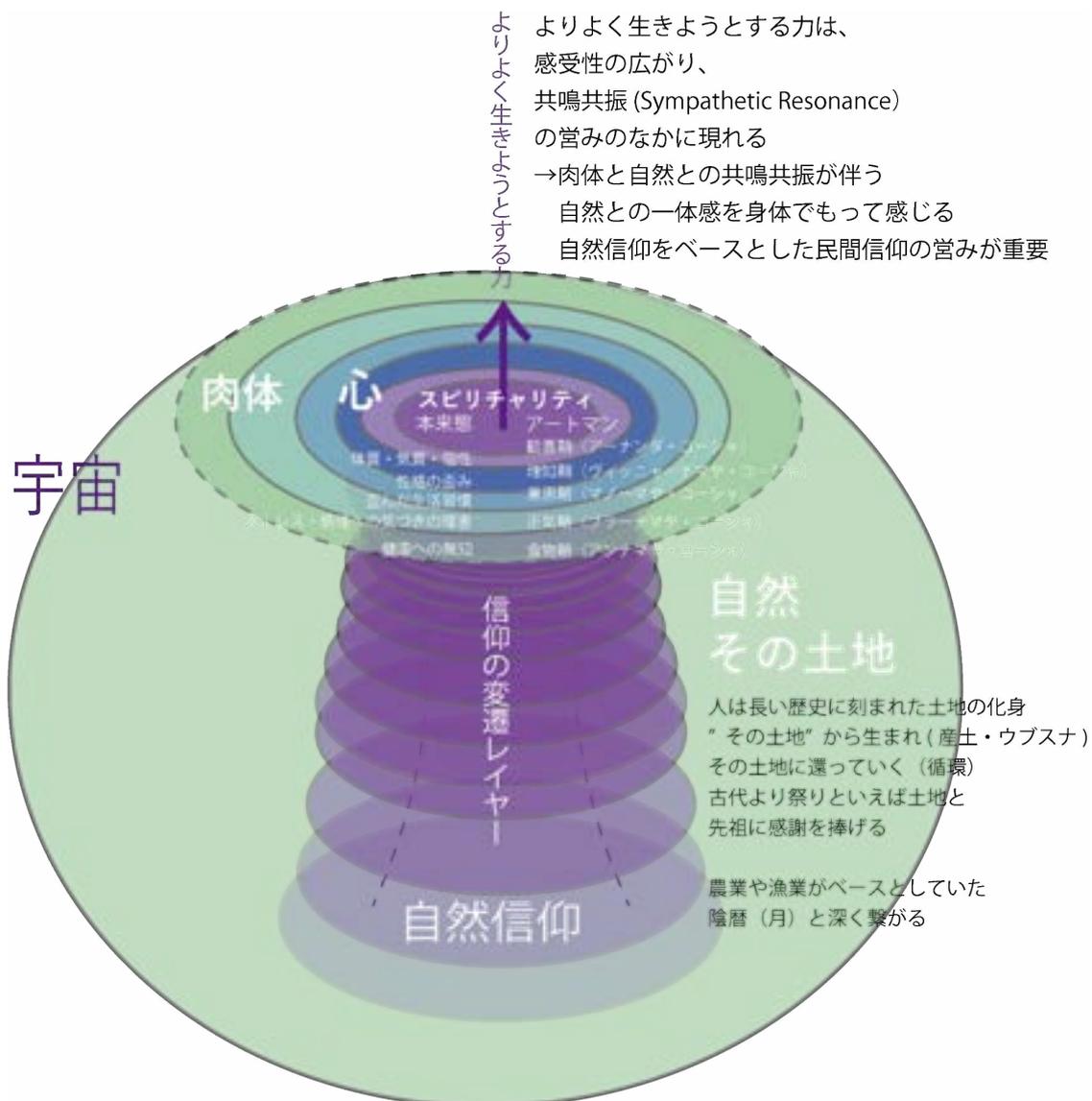
鳥 鳥信仰~朱雀(火の鳥)、太陽、超越 / 柱 柱信仰~諏訪(御柱祭)

Step3.神社としての成立(古代国家) 月読神社 大陸に対する国家的威信

それらに加えて、そのプロセスは、人々の民間信仰の中にも、その後の神仏習合から仏教信仰までの信仰も加わり、信仰の変遷レイヤーとしても残されている。

本質的な心身の癒しにアプローチするには、スピリチャリティへのアクセスが不可欠である。それは宗教や現代の流行りのスピ系に称される現世利益ではなく、身体性に宿る自然との共鳴共振の自然信仰をベースとした民間信仰の営みに触れることは欠かせない。私たちの心身の健康を扱うためには、肉体の生物としての系統進化と同時に「心」の系統進化のプロセスへの理解が重要で、つまりその土地の民間信仰を理解することが重要だと言える。(図3)

(図3) 信仰の変遷レイヤーとスピリチャリティ



また、その自然信仰は、その土地資源や大切にしてきたものを、言葉や文字ではない祠や木々の位置で後世に伝えようとしている。その読みときのプロセスを通して、私たちは後世の人たちと心の中で会話をしている。

自然信仰や民間信仰の行事、祭、神々を祀る祠は、地域にとって重要な地域資源や地域利用の先人からの伝承を伝える景色である。と同時に、自然と人間の共振共鳴にとって、自然本来の景観(スケープ)「スピリチュアル・スケープ」は、心身の癒しに貢献する。一つ目は、先祖や先人から残してもらった恩恵や時間軸の長さを理解する。二つ目は、自然信仰は自然と人間の共鳴共振であることを体感する。三つ目は、私たちはどこからきてどこに帰っていくのかという死生観に目を向けさせるのである。

令和4年の調査でもあったように、彦岐には景観を何よりも大切にしている特性がある。平成25年10月に行われた市民意識における景観の現況のアンケート(配布数2,500件/有効回答数1,010件/回答率40.4%)の結果でも明らかである。(以下、問9②参照)86.6%の市民が彦岐市全体で景観形成に取り組む必要があると考えている彦岐の景観は、本州では絶対にあるであろう海岸沿いの注意喚起や柵を極力設置しないことで、景観を保っている。(写真下:左京鼻)



問9② 景観形成を進める際に特に重要だと思われるもの

それらの景観は、この極々短い200年程度に急激に変化した現代の景観ではなく、私たち人類史のそれ以上の長い期間みてきた景色に限りなく近い。小さいスマートフォンの枠組みを日々見ているスケールから、360度の自然景観に囲まれるスケールにシフトチェンジしてくれる。つまり、鎮守の森における心身の癒しにとって、重要な2つのスピリチュアル・スケープの要素が、彦岐には揃っている。



鎮守の森における心身の癒しのアプローチは、前年の4つに加え、「自然信仰・民間信仰の特性を生かす」を加えることとした。①身体アプローチを重視、②コミュニティの安全性、③自然の中でのアプローチ、④長期的な時間軸を意識する、⑤自然信仰・民間信仰の特性を生かす、と再定義することで、より本質的な心身の癒しにつなげていく。

今後は、この彦岐で継続的にプログラムを実施していくスキームを作っていくことが課題である。また、まだまだ奥深い彦岐の信仰と暮らしのごく一部しか見えていないのも確かである。それらを探るプロセスをアカデミック・ウェルビーイングとして、引き続き、彦岐の人たちとともに、学びながら、進めていく。それらは、彦岐以外にも、それぞれの土地に刻まれた歴史と風土、地域の特徴的な信仰をアクティブ・ラーニングを通して学ぶ形として今回残しておく。その学びは、スピリチュアル・スケープを探りながら、「自然と共鳴」するプロセスで心身の癒しとなる。自らは生命循環の一部であることを身体で理解し「自然の子として社会に生きる」ことで地域の自然循環に「楽しみながら貢献」し、自然と地域の課題にも気づいていく。それらは病気でありながらも心身を癒し、よりよく生きることを目指すことと同じとなる。

## 7、参考文献

吉岐文化財調査委員会編「吉岐島の民間信仰神」昭和50年3月1日発行  
中上史行著「吉岐の風土と歴史」平成7年10月16日発行  
吉岐神楽保存会編 芦辺教育委員会発行「吉岐神楽」

## 8、成果品

以上の報告書

別紙1:吉岐における民間信仰の神々集計表

別紙2:「スピリチュアル・スケープ・ワークシート」